

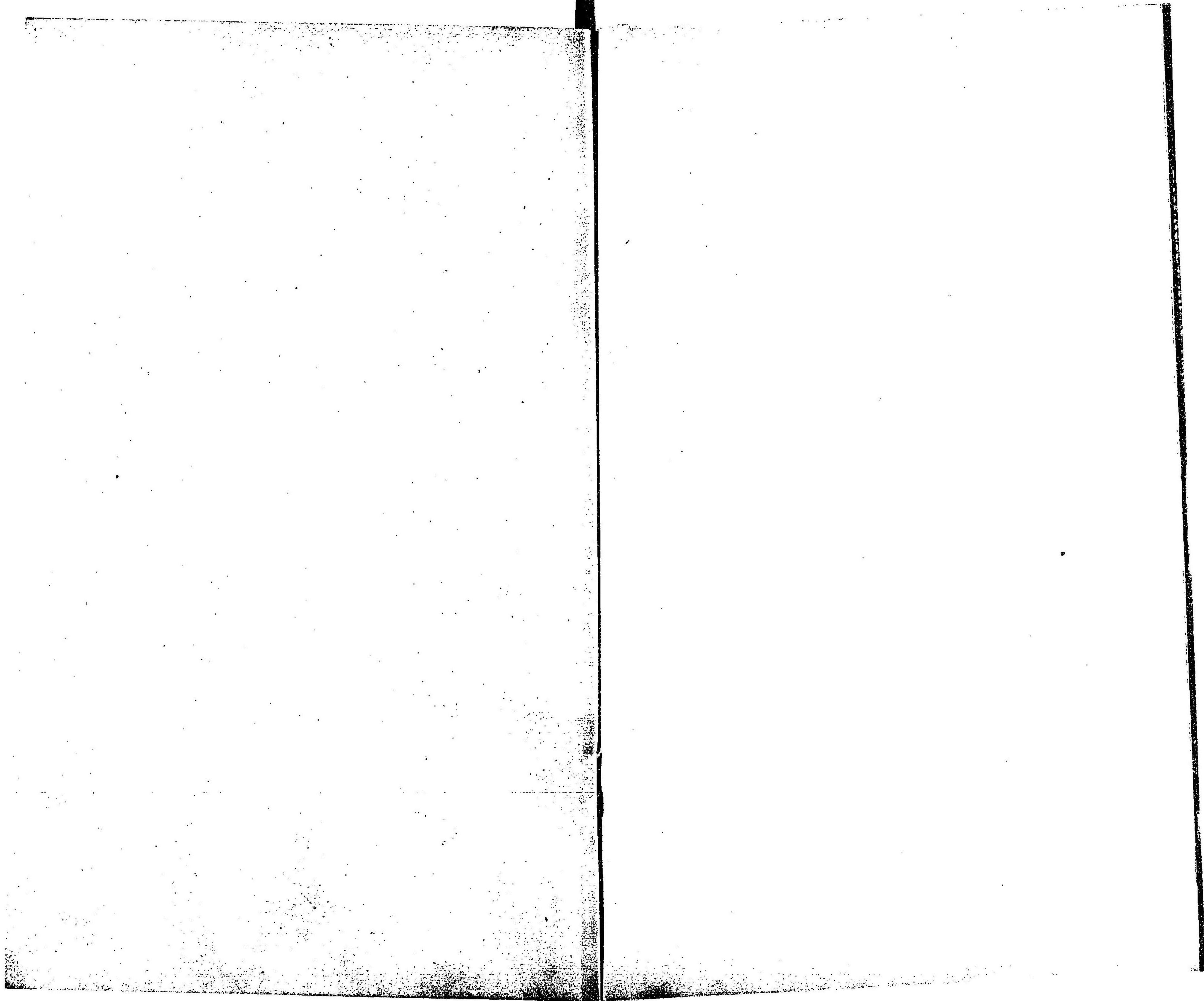
特

8



265  
109







法  
中  
專  
音  
息  
緒

傳

明治  
43. 6. 27  
丙交



己酉初夏

柳江題



項羽

玉蘭作

三つ兵を會橋に起すあり

むかふところ勁敵なく

雄名天下に轉きつる

流石の英勇楚の項羽也

時なるかな戦やぶれ

残兵八千をさしよまぬ

坂下にこそは退きたり

時かころは秋の末



残日すゞに西後に沈み

霜月高く東山に上れば

萬籟聲を收め四隣寂寥

遠征の將士轉た涙を催せり

折もこぞあれ坂まより

如何なる人の遊戯にや

歌に和し洞蕭を吹けねば

其響最も悲痛にりて

餘韻嫋々縷のごとく

予の楚兵俄に故山を憶ひ

互に従い落ち去りて

残り少くなりけり

去程に四面楚歌の聲を聞き

項羽は天を仰て長歎

嗚呼皇天吾をとすかど

豪勇無双の英傑も

慷慨胸に押しせまより

お妾でぞ見いたれば

虞美人其膝に寄繼り

多年君に従ひ侍りて



幾多の艱難に出逢ふ

涙一滴、ばやぬ身

今日は如何なる事やらむ

落る涙はせきあはずと

初音を渡らす郭公

聴くに哀ぞまよひける

聴て項羽は敵陣を指示

観らるゝ如く數萬の敵軍

十重廿重にも取巻けは

逃るゝ術もなよ竹の

か弱き卿を連れ難

とはいへ遠に別れん事

絶ぬつらよこの心の中

さう給へと勇將の

眼にもくぐれの一頻

降りも懸らむ許りなり

虞美人纔に面をよけ

たとへ野の末山の奥

何地如何なる所とも

表の在さへ限りには



我亦たんとら仕らむ

是非兵刃連れ給ひぬと

言れて胸に置き餘る

ふかきなまげを垂た

受けて項羽は立ち上り

力拔山兮氣蓋世

時不利兮騅不逝

騅不逝兮可奈何

虞兮虞兮奈若何

虞美人亦之に和し

俱に歌ひ俱に泣き

残燭愈黯く

音調愈濕ふ

折れ聞ゆる金鼓の響

いざや敵軍寄ぬ間に

吾は一方切り開かむ

卿は是より如何にあり

生命を全し給へか

我亦不思議に運命開けなほ



再び相見する事あらむと

思ひ入りたる言の葉た

虞美人今際と諦めつ

御名残は盡きねども

首尾克御開き給るべし

さきと此儘所残らば

いとも愚の業なれば

假りに男の姿に替へ

遁れぬ途も落ちて見む

あはれ御佩刀を貸し給へど

請れて餘儀なく佩劍を

さらばと解て授れば

忽ちひらめく劍の光

虞美人自ら喉を突き

ドウと許りに伏し給ふ

こはそも何たる生害ぞと

抱きかゝゆる膝の上た

サツと迸る血汐の雨

花のおんばせ色褪て

たげの黒髪振り亂れ



美しき程ひとほに

物凄くこそ見いたかりけれ

虞美人項羽の手を取て

徒に御心を煩せし事

いとわがごとく候へば

甲斐なま命を此所に捨て

魂魄君の影に添ひ

行末ながく守るべし

はな是迄といふ聲も

千草に集く蟲の音と

與に絶入り失せにけり

此時またる金鼓の響

漸次に間近く聞ければ

項羽は馬に打騎りつ

美人の屍に禮拜し

残る勇士を従へて

圍みを突きて驀地

江東指すぞ落ちにけり



明治四十三年六月十日印刷  
全 四十三 年六月二十五日發行

編輯人兼

有 村 彌 四 郎  
大阪市東區和泉町二丁目一番地

印刷人

藤 井 護 三 郎  
大阪市東區和泉町二丁目一番地  
電話東四五九番

發行所兼

藤 井 改 進 堂  
大阪市東區和泉町二丁目一番地  
長電話東二七〇番



265  
109



